



Title	低座椅子と日本人の暮らし : 椅子の導入の初源的様相からの再考
Author(s)	石川, 義宗
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 34-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67720
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

低座椅子と日本人の暮らし

— 椅子の導入の初源的様相からの再考 —

石川義宗／東洋美術学校

日本人の起居様式は文明開化以降に西洋化し、椅子の導入はそれとともに19世紀末以降に進んだと考えられている。しかし、日本の椅子の歴史を振り返ると一つの矛盾に直面する。それは、20世紀になって生活改善同盟や同潤会アパートの登場、共管住宅標準設計51C型の普及がモダンなライフスタイルを提示したにもかかわらず、坂倉準三の「竹製椅子」(1948)をはじめとする、座面が低くくて伝統的な畳敷きを想定した低座椅子の一群が登場し、日本のモダンデザインに独自の軌跡を残したことである。たとえば、「ひも椅子」(1950)や「低座椅子」(1960)、「スポークチェア」(1962)といった椅子は座面の高さが250~300mmくらいである(普通の椅子は450mm程度である)。これらの椅子についてデザイナーたちのコメントからは、床に座る習慣(ユカザ)と椅子に座る習慣(イスザ)の調和を意図していたことがうかがえるが、これは和洋の分化を前提とした洋室の拡大と和室の縮小という住宅設計の近代化に対し、椅子の普及がそれと必ずしも呼応せず、むしろ独自の概念を持ってデザインされたことを示唆しているのではないか。では、その概念とはいかなるものか。

本発表はこの疑問の糸口として椅子が西洋化によって普及したという事実を再考する。大衆紙の批評などから明かされる趨勢は、椅子の導入が欧化政策の政治的なアンビバレンスに引き込まれていたことである。例えば、福沢諭吉は著書『西洋衣食住』(1867)で「西洋の家には畳なく板張の上に(略)椅子を並べてこれに腰を掛る風俗なり」(一部を

新字体に置き換えた。以下の引用も同様にする)と記しているが、そこに付された図版の椅子は歪んだように曲線的であり、脚の接地が背もたれよりも前にきていて不安定なうえ、構造上重要な貫が直線として省略されている。異国の文化に所属するものへの眼差しは、見慣れぬものへの好奇心とともに違和感を含んでいたことがうかがえる。同著における福沢の筆致は西洋の文化を紹介することにもっぱらつとめているが、開化派の人々は必ずしもそうではなかった。例えば、医学者・横河秋濤は『開化の入口』(1873)にて「足で踏處へ直に寝たり、小児の遺尿たれる處へ食物を並べたり、どうも話にならないじゃないか。」とユカザに対して批判的である。同様の論述は当時の大衆紙に散見されるが、ここでひとつの風刺に注目したい。それは『開化のはなし』(1879)の一部である。三人がテーブルを囲って椅子に座っている。上座に座る西洋主義者・文明(フミアキ)が伝統主義者・石部(イシベ)を家に招き、石部の伝統的な袴や刀を批判する。すると石部も黙っておらず、文明のうわべだけの西洋化を口撃するのだが、二人の様子を見ていた三人目の発言によって石部の批判は転倒してしまう。「只今の御高輪、隔屏聴[たちぎきして]して敬服[おそれい]りました、実に文明開化は御論の通り、しかし、君に御尋ね申ふしい一事がござります、見れば、君は毎常刀を挿して御出なさるが、それは畢竟何の為になさるのでござります」。彼にとって文明であれ石部であれ、形ばかりにこだわっていることに変わりはないのである。この発言は

西洋化と伝統を重んじることの論争を眼前に、庶民がそれから置き去りにされている状況を風刺しているのではないか。このことから椅子を大衆の生活世界に導入する際の課題が浮かび上がる。それは、どのようにして椅子はこのアンビバレンスから救出されたのかという点である。例えば、E・S・モース（1838-1925、動物学者、東京帝国大学）は著書『日本その日その日』（1917）にて横浜郊外の農村に滞在したときのことを次のように記している。「これが大工のテーブルに対する概念である。椅子は旅行家用の畳み椅子を真似たのであるが、畳めない。テーブルは普通のよりも一尺高く、椅子は低すぎるので食事をする時、私の頭が非常に好都合にも、皿と同じ高さになる。」（石川欣一訳）名もなき大工が作ったテーブルと椅子は不自然な関係であるように思えるが、モースはここで一つの誤解をしているかも知れない。モースが「旅行家用の畳み椅子」とした椅子は、その挿絵と記述の様子から、畳のうえで伝統的に使われてきた日本の折りたたみ椅子ではないのか。例えば、『日本家具図案と製作法』（1911）に掲載されている椅子は、その交差した脚の構造や「たたみずり」（畳を傷めないよう脚の先端に付いたレールのような部品）といった特徴においてモースが見た椅子と同様だと思われる。そして、ここから推察されることは、そもそも日本には椅子に相当する製品が存在し、日本人はまずはそれを代用することでイスザの起居様式を模倣したのではないかという点である。西洋化と伝統を保守することの二項対立的な論争のそとで、庶民はありあわせの椅子の概念を試行錯誤していたのではないのか。すなわち、椅子を作ったりそれに座ったりするという行為が個別的、偶然的に生じ、大衆の中で椅子の経験が一から蓄積していったことが椅子の概念を政治的なアンビ

バレンスな状況から救済したのではないだろうか。

1928年に蔵田周忠が日本のインダストリアルデザインの嚆矢ともいえる「形而工房」を設立したのは、これから約十年後のことであった。蔵田自身は畳に否定的なコメントを残しているが、1934年に発表したダイニングチェアにはたたみずりがある。また、ダイニングチェアの特徴である交差した脚は先の伝統的な折りたたみ椅子を思い起こさせる。1935年に鳥取民芸家具の吉田璋也が発表したラダーバックとカウホーンの貫を持った椅子と比較すると、その独自性は明瞭になる。また、木檜一はシステムチックな椅子のバリエーション（スツールに肘掛や背もたれをつけたり複数の椅子をつなげて長椅子のようにしたりする可変型の椅子のアイデア）を発表しているが、それも和室を想定していたことを『我が家を改良して』（1935）に記している。

以上のように、モダンデザインの椅子の黎明期は、イスザの単純な輸入ではなく、ユカザへの振り返りでもない。そのような二項対立的な思考ではなく、庶民の暮らしという第三の存在に目覚めたことが前史としてあったのである。そして、ユカザとイスザに区分別れない折りたたみ椅子を再考し、自らの暮らしに、自らの椅子を試行錯誤したのである。いわば「椅子」とは“chair”の翻訳ではないかも知れない。低座椅子はそのような日本の椅子を巡る出生を物語るプロダクトデザインとして評価される。